



# 豊臣秀吉のめざした「天下人」のすがたとは

—「御所参内・聚楽第行幸図屏風」を手がかりに—

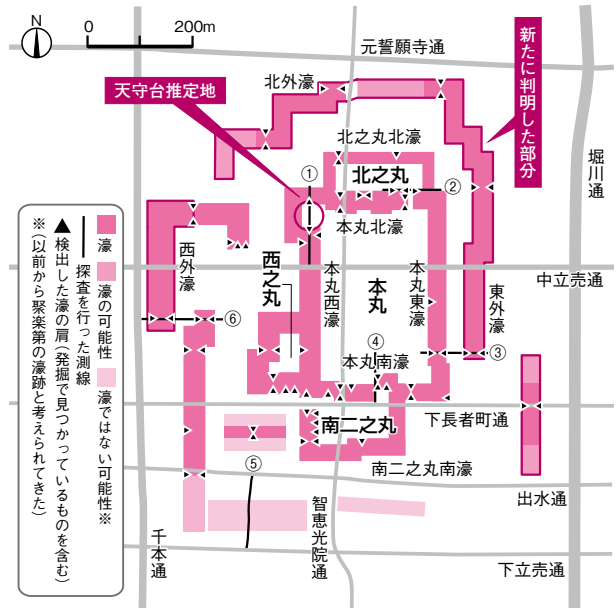
私立海城高等学校 横井成行

金泥に彩られた雲がたなびき、建物の屋根や松の緑などが色鮮やかに目に飛びこんでくる。見るものの目を惹く図屏風である。しかもこれまで知られていた聚楽第図に欠落していた部分‘天皇の行幸のようす’と‘秀吉の参内のようす’を補う、いわば「完全版」だという点を生徒全員に知らせておきたい。この図は、長い戦国争乱の末にできた統一政権としての豊臣政権の姿を、視覚で捉えるのに最適である。

つぎに、研究によって明らかにされている次の4つの「基礎知識」を説明しなければならないだろう。①聚楽第が描かれている位置はかつての天皇のマツリゴトの根拠地=内裏であったこと、②聚楽第が存在したのは1586年～1595年のわずか10年足らずであったこと、③聚楽第は、深く長い濠をめぐらせたうえに望楼形式の天守をもつ城郭建築だったこと、④この図屏風は新潟県上越市の個人の方がお持ちであったこと。

そして、しばらく時間をあけて、『図説日本史通覧』p.141の「ヒストリースコープ」や「考察」、さらにキャプションなども参考にしながら、生徒全員にこの図をじっくり見てもらった上で、各自が目にした点や疑問に思う点を挙げてもらうことが大切である。むろん、史料としてのこの図屏風に関する調査・研究そのものが緒に就いたばかりなので、これからいろいろなことが新たに判明してくる可能性があることを付け加えておこう。ことに、歴史の授業には大切な意義がある。それは、これまでに築かれた歴史像が、絵画史料をふくめて史資料に対する、より合理的で新たな解釈が提起されることによって、変化する可能性をもっていること、またそうした新たな解釈や歴史像の変化に生徒自身が参画する資格があることを、生徒自身が体得する機会だということである。

さて、生徒の反応はどうか。Aくん「先生、秀吉が聚楽第を築き始めた時期が、秀吉が太政大臣



(京都市防災研究所共同研究チーム提供図より作成)

になったうえに後陽成天皇から豊臣姓をもらっているときと同じというのが僕は気になります」, Bさん「聚楽第が城だったというのは、この時期の秀吉の動きとどんな関係があるのでしょうか」, Cくん「キャプションに、秀吉と天皇の乗る乗り物が同じ高さに描かれている、とありますが、そもそも、秀吉が天皇を聚楽第に招くというのはどういう意味があるのですか」, Dさん「私、京都や東京ではなくて、上越市という地方でこの図屏風が見つかったということに興味があります」

いずれも難問である。どう答えれば、生徒諸君は納得するだろうか、また興味をもって自分でも調べてみようという前向きな姿勢になってくれるだろうか。

質問に答える前に、付言しておくことがある。そもそも、『聚楽行幸記』には「聚楽」の意味について「長生不老の楽を聚<sup>あつ</sup>むる」と記されているが、聚楽第そのものは、その命名自体が「壮大な皮肉」とも思えるほどの末路を迎えた。秀吉の甥・秀次に、聚楽第が関白の位とともに譲られたことが一因で

ある。秀吉の実子秀頼の誕生(1593年)によって、「第主」の秀次が秀吉に疎んじられて幽閉、自害の強要の悲運に遭うことで、秀次と一体化した聚楽第は破却された。その遺構の一部は京都・大徳寺の「唐門」にも見られるというが、聚楽第そのものはその後も再建されてはいない。むしろ、その後の豊臣政権のベクトルは、大坂城を拠点とし、中国大陸(明)を見すえた「唐入り」=朝鮮半島への侵略戦争のほうに向かう。だから、聚楽第そのものに秀吉自身が固執していたとは思えない。聚楽第は、まさに、「天下人」たる秀吉が、「主役」となって大きくクローズアップされる、一種の「ショウ」のための舞台装置であったとさえいえる。

Aくんにはこう答えよう。「そうだね。年表で確認してみると、Aくんの指摘どおりだ。太政大臣となり、これまでになかった姓を新たに天皇から与えられた時点で、秀吉自身が天皇との関係をより密にして、臣従する大名たちや、公家たちにも「天下人」としての権威の所在を分からせようと試みたとみられる。わざわざ昔の内裏の所在地に聚楽第の敷地を設けたという点にも現れているね。徳川家康を伴って工事を見ているというし、これだけの構造物としては突貫工事といってもよいスピードで1587年2月には完成させてもいる。ただ、次のBさんの注目点にも関係するが、九州仕置とって九州地方の武力平定(=「天下人」が命じる「<sup>そうぶじ</sup>惣無事」の実現)に忙殺されたため、秀吉の権威づけの意図が実現したのは遅れたようだね」

つぎにBさんにはこう答えよう。「聚楽第に限らず、この時期の城郭には中世から戦国時代までの城とは異なる新たな機能が付け加わったね。城は、山や丘陵が利用されていたのが、平野や平地に好んで築かれるようになったね。つまり、防御施設というよりは政庁として機能し、権威を象徴する役割へと変化したね。聚楽第に望楼形式の天守があったという記録はそれを物語っている。ただ、「天下人」としての秀吉は九州仕置に引き続き、関東仕置(小田原の北条氏の武力平定)や奥州仕置(伊達氏などの服従)をやり遂げなければならなかったんだ。つまり、戦時体制を敷かねばならなかつ

たといっいいい。だから、城郭の形を取らねばならなかったといえるのではないだろうかね」

さらにCくんにはこう答えよう。「そうだね。実は、天皇を招く前に、秀吉は古記録を調べさせて、このような行幸は室町時代に2度しか行われておらず、いずれも天皇が將軍の邸を訪ねる形式だったことを把握している。秀吉はあえてその前例を破り、自ら天皇の御所に迎えにいき、天皇の着物の裾をもって乗り物に乗せる手伝いをして天皇の「家族」の一員であることを演出したというんだ。しかも、天皇は5日間も聚楽第に滞在し、公家や大名も集まったというから、まさに「天下人」の権威を誰が見ても分かるようにしたんだろうね」

最後にDさんにはこう答えよう。「どういう伝来経路上越市の個人の方の手元に入ったのかはわからないし、軽々には言えないことはわかってほしい。ただ、こうした史資料や文化財がどういう場所で見つかり、どのようにその地域で保存されてきたかということに興味をもつことはとても大切だ。例えば、よく知られている「洛中洛外図屏風」などの場合、それを所蔵する大名家などが京都という「首都」を、文化・経済・政治・風俗の最新の集積地とみなし、好んで絵師に描かせたり、大名同士の贈答に使われたりすることがあった。この「御所参内・聚楽第行幸図屏風」も、かつて上杉氏が拠点とした上越市に伝来しているという点からすると、豊臣政権のなかで「五大老」の一人に数えられた上杉景勝などが、秀吉かその側近から臣従の証として贈られたとも考えられるね。興味をもったら、これを寄託されている上越市立総合博物館に問い合わせたり、学芸員の方に実際に取材してみたりすると、自分なりの考えが補強されるよ。もっとも、先生の言っている仮説は、単なる状況証拠に基づいているに過ぎないから、まったく実証的ではない。だから全面的にひっくり返される可能性もあるよ。でも、こうやって、皆でいろいろと意見を出してみても、またその周辺の史料にもあたってみて本当はどうなのだろうと探求していくところに歴史を自分のものにしていく醍醐味があるんじゃないかな」